

# 日本オーストリア友好 150 周年 (日本側ステートメント)

2019 年 1 月  
在オーストリア日本国大使館

## (導入)

日本とオーストリアは、1869 年 10 月 18 日に、日墺修好通商航海条約を締結し、国交を開設しました。

## (周年とロゴ)

2019 年はそれから 150 年目という節目の年に当たり、両国政府は、この記念すべき年をできるだけ多くの人々と共に祝い、両国の交流を一層促進するために、この年を「日本オーストリア友好 150 周年」とし、周年の公式ロゴを作りました。このロゴの左の赤い丸は日本国旗を、右の赤と白の縞模様はオーストリア国旗をそれぞれ表しています。



## (周年事業)

2019 年は、150 周年のロゴがついた周年事業が、オーストリアと日本において、文化、青少年、スポーツ、学術、経済、政治等の様々な分野において、多数開催される予定です。オーストリアでは現時点でも 130 以上のプロジェクトが計画されていますが、主要な事業としては、今日これから開催されるオープニング・イベント、3 月のトーンクンストラ・オーケストラ・ウィーン公演、4 月～6 月の永青文庫展、7 月のジャパン・フェスティバル、10 月～2020 年 4 月の浮世絵展が挙げられます。

## (連絡協議会)

当館は、150 周年の準備のために、主にオーストリアに所在する日本関係機関やオーストリアの政府機関等をメンバーとする連絡協議会を立ち上げ、これまでに計 5 回の会合を行い、周年事業に関する意見交換・情報交換を行ってきました。連絡協議会の主要メンバーは、墺日協会 (ÖJG)、オーストリア日本人会、ウィーン日本人国際学校、日本政府観光局 (JNTO) フランクフルト事務所、ケルン日本文化会館、オーストリア欧州・統合・外務担当省 (BMEIA)、オーストリア・デジタル化・経済立地担当省 (BMDW)、オーストリア連邦産業院 (WK0)、将来の課題のための日・オーストリア委員会、ウィーン大学です。

## (大使館の目標)

当館は、日本とオーストリアの関係が、150 周年を契機として、政治、経済、文化等の様々な分野においてますます発展するよう取り組んでいきます。政治の分野では、政府要人や国会議員等の交流が活発に行われることが期待されます。経済の分野では、来月 1 日にも、日 EU・EPA が発効し、日 EU 間の関税が撤廃・引下げされること等により、日本とオーストリアを含む EU との間の貿易・投資環境が大幅に整備されます。2 月 17 日には ANA の羽田・ウィーン直行便が就航しますが、これにより、日墺間の人の行き来が一層盛んになるでしょう。特に、今年は、日本では、4 月～5 月の即位・退位の礼とそれに伴う元号の変更、6 月の G20、8 月のアフリカ開発会議 (TICAD)、9～11 月のラグビー・ワールドカップ、10 月の即位礼正殿の儀と大きな行事が目白押しですので、こうした機会を捉えても多くのオーストリア人が訪日することが期待されます。このほか、文化を中心とする多数の周年事業が開催されることにより、両国国民の相互理解が一層深まり、両国間の友好がますます促進されることを期待します。

# 日本オーストリア友好 150 周年 (オーストリア側ステートメント)

2019 年 1 月

オーストリア欧州・統合・外務担当省 (BMEIA)

## 二国間文化関係一般：

10 年前の日澳外交関係 140 周年に際して 1 冊の素晴らしい本が出版されました。その中で、ユッタ・シュテファン＝バストル・オーストリア大使 (当時) は、1873 年の日本の万博への参加と当時の帝国において日本の芸術が非常に大きな反響をもたらしたことを書きました。

そこに書かれた日本文化に対する感動や日本の魅力は、ちょうど終了したウィーン芸術フォーラムでの展覧会からも分かるように、今日に至るまでオーストリアで続いています。

しかし、外交関係 150 周年のような特別な機会は、さらに注目を集め、協力の動機を強くする機会を提供します。

デジタル化がますます重要な役割を果たしている時代において、人々の出会い、集まり、そして共に関心をもつテーマに関する交流は少なすぎます。デジタル化によってもたらされた可能性は人々が近くににいるという印象を生みます。しかし、これは単なる勘違いによる印象であることが殆どであり、遠い国の印象が断片的で誤ったものになる可能性があります。私達が今年共に祝うような年は、新しい印象を集め、ステレオタイプを修正し、再び又は新たに共通のものを見つけるためのすばらしい重要な機会を提供します。

私は日本国大使館に対し、オーストリアにある様々な機関との協力によって生まれた本当に素晴らしいプログラムに感謝します。このプログラムの裏にどれだけ多くの仕事があり、小井沼大使が大使館のチームとともにどれだけ長く集中して周年に準備してきたか、想像に難くありません。

## 音楽：

10 年前の外交関係 140 周年の際の祝祭の中心にあったものは、文化の創造、特に、音楽でした。音楽に対する特別な情熱は、2019 年も、例えば、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フォルクス・オーパー・シンフォニー管弦楽団、ウィーン少年合唱団、ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団の日本公演から感じられます。

私達の国の音楽の結びつきは相当な昔に遡ります。1887 年に東京に設立された東京音楽学校の初代学長であるルドルフ・ディットリヒは、この西洋音楽の教育機関を共に設立したアントン・ブルックナーの生徒でした。この学校の設立により、ウィーンとの緊密な交流が始まりましたが、特に音楽の友の会がその役割を担い、多くの日本の音楽家が日本の音楽の遺産をウィーンに紹介しました。そのため、この協会には、日本の音楽、伝統的な日本の楽器等に関する木版画の優れたコレクションが残っています。

オーストリアの海外文化政策では現代音楽が特に重要であり、助成プログラム「ニュー・オーストリアン・サウンド・オブ・ミュージック」によって、音楽家を外国に派遣しています。私達は今年特に日本との間であらゆる音楽のジャンルを超えてこのプログラムを実施する予定です。

そのハイライトのひとつは、外務省の要請で 11 月に日本での世界初公演が行われるガブリエレ・プロイの「周年の曲」です。

## 展覧会：

注目に値するのは、美術史博物館の日本への関心です。1990 年に東京の東武美術館で初めて「栄光のハプスブルク家展」が開催されて以来、美術史博物館コレクションの展覧会は日本において 40 回以上開催されました。2019 年も美術史博物館は再びハプスブルク家コレクションの傑作の展示の計画を進めています。

更に言及したいのは、ウィーン博物館とベルヴェデーレの展覧会であり、また、個人的に非常に嬉しいのは、オーストリア最大のメディア・アート・フェスティバルであるリンツ・アーツ・エレクトロニカの日本との協力です。日本ほど新しいテクノロジーやその日常への統合に関心をもつ国がないことに異論はないでしょう。

## 未来：

海外文化政策は、私達にとって、芸術、文化そして学術との共同作業を意味します。そのため、私達は、今年、両国の芸術家・文化人・研究者のネットワークを構築することに特別な関心をもっていません。人的交流の支援に加え、組織間の協力の支援も重要です。

グローバル化の時代において、良いアイデアがどこから生まれるのかということは重要ではなくなっています。それよりもずっと重要なのは、共に大きな課題やテーマに取り組み、その解決方法を見つけることです。そのために、国境を越えた視点をもつアーティストや研究者の力、インスピレーション、創造性が必要になります。